

---

# 嗤う人魚

唯人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

喰う人魚

### 【Nコード】

N7199W

### 【作者名】

唯人

### 【あらすじ】

小さな漁村で生まれ育った汐と千太郎。生真面目な汐に比べ、千太郎は女好きで口の悪い青年だが、二人は無二の親友だった。ある日、村の子供の平吉が瀕死の重傷を負いながらも、奇跡的な回復を遂げる。平吉は二人に「実は人魚に助けられた」と話す。所詮夢物語と考えていたが、村人が次々と奇病に襲われ、汐の恋人にも病の手が伸びたことから、二人は平吉の云う「人魚島」を目指す事になる。

## 第一話

十一になる平吉は初めての漁に出た時、突然の高波にさらわれた。平吉の親兄弟や漁師仲間が荒れる海の中、必死に搜索を続け、二日後、浜から数里も離れた岩場に倒れている平吉を発見した。平吉は岩に頭を打ち付け、鮫にでも食い千切られたのか肩腕をもぎ取られており、救助された時には既に虫の息だった。

この子供は助からんやろう。村の誰もがそう思っていた。

平吉が発見された夜、お母の作った芋煮を手に平吉の家に行った。囲炉裏の横に寝かされた平吉の頭には、何重にもさらしが巻かれ、腕を失くした身体からはすえた匂いが漂っていた。平吉の親と兄貴たちは、憔悴しきった様子で瀕死の末息子を見つめていた。

こんなことは珍しくはない。現に俺も、十の歳からお父の船に乗っているが、荒波が押し寄せる度、何度も死にそうになった。舟がひっくりかえり、網に引つ掛かってようやく命を拾ったこともある。船に乗り、魚を釣り上げるのは、この小さな漁村の男に生まれた以上、当たり前のことであり、一年の内に何人かは海で死んでいく。俺は見舞の言葉もそこそこに、平吉の家を出た。

山道を下るにつれ、川のせせらぎが穏やかになる。

「村に戻つたらすぐに平吉の葬式やろうなあ」

千太郎せんたろうは大きな籠を背負い、はだけた着物から覗く胸をぼりぼりと搔いた。

「まあ、兄貴が四人もいる事だし、差し当たってどうってことはないやろうけど」

「滅多なことを言つもんやないぞ」

一応たしな察めてはみたものの、俺も同じ意見だった。平吉の家には、既に嫁を取った二十歳の長男を頭に、五人の息子と二人の娘がいる。上の娘は隣村の息子との縁談も決まっております、平吉が死んだところ

で人出に困る事はないだろう。

「分かつとるわ。相変わらず冗談の通じん奴やな」

「お前の冗談は冗談で済まんのや」

そう言つて肩を竦めた。同じ歳の千太郎とはおしめを付けている頃からの幼馴染だ。互いに気心の知れた仲だが、千太郎は正直で素直な男だけに、齒に衣着せぬ物言いであらぬ誤解を受けることも多い。ただ本人は周りにどう思われようが全く意に介さないようだが。「お前が真面目過ぎるんや。もつと気楽にいこうや」

千太郎は焼けた肌から大きな齒を覗かせ、あつけらかんと笑つた。「それにしても、今日も暑いな。庄三もどうせ嫁を貰うなら秋にすればええのに。その方が子作りにも励めるっていうもんやろ」

「まあなあ」

荷車を曳く手を止め、手拭いで額を拭つた。陽が高くなるにつれ、既に皮が剥けた首の後ろがじりじりと焼かれて痛む。

「確かに、この夏はやたらと暑い日が多いな。でもそのお陰で干魚も塩も出来がええのなら、文句は言えんやろう」

「そつや。儲け時やからこそ、俺らが選ばれたんやろ。そこら辺は村長もよう分かつてるよな」

こつして俺たちが塩を乗せた荷車を曳き、干魚の詰まつた籠を背負つて山道を歩くのは、中の荷を売捌くためだった。夏の最中、重い荷を背負つて峠越えをするには、若くて力のある者でなければ務まらない。今回その役目に俺たちが選ばれたのだ。

俺たちの住む古納村は一年を通して漁には恵まれているが、土地は痩せており、米や野菜は殆ど育たない。そのため、男たちが釣つた魚を女や年寄が干魚にし、海水を何度も汲んでは大鍋で煮立て、塩を作る。それを近くの農村で米や野菜に換えて貰うのだ。だが着物や陶磁器、大工道具といった代物は山を越えた大きな町にまで来ないと手に入らない。それも村同士のように物々交換というわけにはいかない。町で品物を購う為には、卸問屋で金子に換えて貰う必要がある。

今回の行商の目的は、船や網の修理に必要な工具を買い求めるためと、漁師仲間の庄三の代わりに結納の品を揃える為でもある。肝心の庄三は、数日前に鯨漁船に乗った。鯨取りに向かう際は、近隣の漁村の人間たちと船団を組み、遠洋にまで出るので何日も岸に居れない。

庄三とは違い、俺たちは一度も鯨取りに行つた事がない。理由は簡単で、どちらも一人息子だからだ。千太郎には歳の離れた兄貴がいたが、鯨取りに行つた時に大風に巻き込まれ大勢の男たちとともに死んだ。弟もまだ幼い時に流行病にかかり、あつという間に身罷みまかつた。俺には男兄弟はなく、姉ならいるがとうに嫁に行つている。他に跡取りのない家の息子が、殊更命の危うい鯨取りに駆り出されることはあまりなかった。

石ころだらけの険しい峠道を抜けると、山から流れる川に沿うように田畑が広がる。畦道は町に近付くにつれ広くなだらかな街道となり、人や荷車の行き交う数も増えてくる。

「もう少しやな」

少し道を逸れた川岸で一旦荷を下ろした。

喉の渴きを潤し、顔を洗う。濡らした手拭いで丁寧に身体を拭くと、比較的上等な着物に着替えた。上等と言つてもただの木綿で、みなで着回している代物だが、汗染みだらけの着物で商いをするよりは余程いい。あまりにも粗末な身形みなりだと、算盤そろばんも満足に出来ないと思われ、こちらの品を買い叩かれたり、町の店主どもに不当に高い値を吹っ掛けられることもあるからだ。

「これでええか？」

千太郎は髪を梳すき、馬の尾状に括り直した。頭のとっぺんの辺りで結わえた髪は肩にまで伸びている。浅葱の着物の襟を整えると、俺よりも一回りは身体の大きい千太郎の男振りが、一段と上がったように見えた。

「よう似合つとるで」

そうか、と満足げに頷いた千太郎とは反対に、思わず大きな息を

吐いた。

「どうした、汐？」

「いや……。ちょっと疲れただけや。大したことない」

「そういえば顔色が悪い気がするな。もう少し休んだ方がええんとちゃうか」

確かに明け方から歩き通しで疲れてはいたが、それより目的地のことを考えると気が重くなったのだ。

「いや……。さっさと終わらせよう」

頭を振り、荷車を掴んだ。

燦々と照る日差しの中、町の大通りは人で溢れ返っていた。子供から年寄りまで、みな商店の軒先で品定めに夢中だ。呉服に簪、薬に団子。ちりん、という涼しげな音に振り返った店先には、ギヤマン彫りの風鈴が並んでいる。

饅頭屋の前を通りかかると、出汁の匂いが空腹を誘った。

「ええ匂いやなあ。昼飯はケツネうどんとお稲荷さんでも食おうか」  
ふんふんと千太郎が鼻を鳴らす。

「狐……」ある女の顔を思い出した。

「どうした。やつぱりしんどいんか」

頭一つ大きい千太郎が俺の顔を覗き込む。

「そんなやないけど。……疲れてるんかな、腹は減ってるんやけど、あんまり食欲が湧かんのや」

「あはやのう」

思い切り尻の辺りを叩かれた。

「見てみい。さすが町娘どもや。村の芋娘と違って垢抜けとるし、別嬪が多いやないか。それだけでも元気が出る、ちゅうもんやろう。なあ、その別嬪さん？」

大声で笑いながら、千太郎は横を通りかかった二人連れの若い娘に手を振った。声を掛けられた娘は「まあ、嫌やわ」と頬を少し赤らめ俯き、もう一人は俺と目が合うと、困ったように視線を背けた。

「みんな照れとるんや。可愛いもんやで」

「よく言つわ」

小さく呟き、溜息を吐いた。

暫く歩くと、目的の乾物屋に着いた。荷を下ろし、見覚えのある男に声をかける。

「番頭さん。古納からの使いで塩と干魚を持って来ました」

「ああ、あんた達かい。久しぶりやな」

三十代の半ばと思しき小柄な男は人懐こい笑みを浮かべた。大店おおだなの番頭らしく、夏の盛りにも拘らずきちんと紺かすりの着物を着こんでいる。

「鰯いかにに太刀魚、烏賊の干物か。どれも肥えていて美味そうやないか」番頭は千太郎が運び込んだ籠の中を覗き込むと何度も頷いた。そして塩の入った甕に人差し指を入れるとペろりと舐めた。

「うん、美味い。今回もいい出来や。うちの店でも、古納の塩は評判がええんやで」

「そらそうやろう。俺たちが何日もかけて丹念に作ってるんやからな」

千太郎は豪快に笑うと、なあ、と俺の肩に手を掛けた。俺はまあな、と曖昧に頷いた。嘘というわけではないが、俺たちはあくまでも漁師だ。塩を炊く人間は別にいる。海が荒れて漁が無い日などに汲み上げ作業を手伝うくらいで、実際どうすれば美味しい塩が作れるのか、ということなどまるで解らない。

「これだけ上等な代物を持って来たんだ。金子は弾んでくれるんやろ」

自信満々の千太郎を余所に、番頭は何故か眉を曇らせた。「それは……」

貧しい田舎者の持ち込んだ品だからといって、金子を渋るような店ではない。だからこそ、どの村も上等な品をこぞって持ち込む。現に棚の上には立派な鰹節に干し椎茸、昆布などが所狭しと並べら

れている。

「言い難いんやけど、最近相場が下がってばかりで、うちの店も随分儲けが減っているんや」

「相場？」千太郎は首を傾げた。「なんや、それ」

番頭は俺たちの顔を交互に見ると、特に馬鹿にするふうでもなく、首を横に振った。

「要するに商品の値段が安くなっている、という事や。自然、買い取りの値も下がることになる」

俺たちは顔を見合わせた。

「物が安くなっている、という事は、米や絹なんかも安くなっている、ということや。それならそれで構わへんのとちゃうんか？」

幾ら学が無いといえど、その程度のことは解る。金子が減ったからといって、村に持って帰る品も安ければ損得はない筈だ。

「そうやないねん。下がっているのはうちで扱うような品ばかりなんや」

「どういう事だ、と言いかけた時、「ただいま」と聞き覚えのある甲高い声が響いた。

「おや、あんた達かい。随分と久しぶりやないの」

女は若い娘でも敬遠するような派手な着物姿だった。爪を染めた手には漆塗の扇子を持ち、きらきらと光を反射する簪には細かい細工が施されている。無粋な俺でも相当高価な代物とわかる。

「お久しぶりです。荷を買って貰いに来ました」

俺たちは頭を下げた。この店に来るのは三度目で、その前は去年の初秋だった。

「ご苦労様です、女将さん」

「確か千太に……汐さんやっただね」

女は番頭の言葉を遮るように手招きした。

「この暑い中、わざわざうちにまで来てくれたんやね。さぞかし疲れていることや。奥の座敷で一休みして行って頂戴な」

「そら助かります」



千太郎は俺の腕を掴むと、当然のように店の奥に向かった。思わずつんのめる。

「お、おい、千太郎……」

「まあええやないか」

指先を唇に当て、声を潜める。

「堅いこと言つとつたら、儲かるもんも儲からんで」

後ろを振り返ると、女将がつり上がった目を細め、唇の両端を上げている。

「せやけど、商いはどうするんや。干魚や塩が売れんなんたら、何も買つて帰られへんのやで」

「安心したらええよ」

女将は腕を組み、番頭に命じた。

「この子らの荷はいつもの値で買つたりや」

「ええんですか？」

番頭は目を丸くした。

「他の出入りの者たちからは、前の二割は安く買つてますが」

「私がいいと言つてるやろ。あんたは黙って言われたようにしたらよろしいんや」

女将は声を荒げ、番頭を睨みつけた。そしてはっ、としたようにまた笑顔を顔に張り付ける。

「古納の塩は評判がいいんや。無理に値を下げる必要はない。お前かてそう思つやろ」

「はあ、と番頭は戸惑いながらも頭を下げる。

「ではその様にさせて貰います」

「ゆっくりでいいからね」

背中に番頭の微妙な視線を感じながら、奥の座敷に通された。

## 第二話

丁稚奉公の少年が、俺たちの前に冷やしぜんざいを並べた。餡子の甘い匂いと、滅多に口に出来ない煎茶の香気に思わず喉が鳴る。

「さあ、冷えてるうちに召しあがって頂戴な。疲れた時には甘いものに限るからね」

「それじゃ遠慮なく」

千太郎は言葉通りさつさと口の中に放り込んで行く。俺も箸を取ると、ゆっくり白玉を口に運んだ。

手入れの行き届いた中庭の池では錦鯉が水音を立て、風通しのいい座敷には品の良い調度品が揃えられている。どうやらこの屋敷の元の持ち主は、趣味のいい人間だったようだ。

女将はこの大店の御隠居の後妻である。三年ほど前に、還暦を迎えたばかりの御隠居は亡くなった。女将が現在三十過ぎといった処だから、親子以上も年が離れていたことになる。本来なら店の後継ぎは前妻の間に儲けた長男の筈だが、身体が弱く屋敷の奥で何年も寝たきりの生活を送っており、とても店に立てるような状態ではない。初めのうちは縁戚の者に口煩くえんせき言われたものの、後妻は意外にも商才に長けており、女将が店に立つようになってからこの数年、店の身代はむしろ安定している、と話したのは他でもない千太郎だ。

「良かったら、もう一杯どないや。すぐに持って来させるよ」

あつという間に椀を空にした千太郎は、こちらに顔を向けた。お前も当然食うだろう、という顔だったが、俺は茶を啜りながら首を振った。千太郎が不服そうに口を尖らせる。

「あれ、汐さんはぜんざいは好きやなかったんか」

「そういう訳やないんです。実は村で不幸があつて、なるべく早く戻るよう、親に言われとるんです」

俺はぼつぼつと、平吉の身に起きたことを話した。

初めてこの町に来たのは、二年前の師走のことだ。町の中は江戸の將軍様に代わり、天子様が国を治める事になったという話で持切りだったが、誰が国を治めようが大して興味はなかったし、そもそも將軍様と天子様の違いもよく解らなかつた。実際それから数年経つた今も、村での暮らしが何か変わったということもない。

そして今日と同じように荷車を曳き、言い付け通り着物を替え、この乾物屋の暖簾を潜った。

「へえ、今回は随分と若い子が来たんやねえ」

毛皮の襟巻をつけた女将は、店先に並ぶ俺たちに、値踏みするかのような、ねっとりとした視線を寄越してきた。

「まだ髭も生えてへんみたいやけど、あんたら幾つやの」

「歳ですか？」唐突な質問に少し面喰いながら答える。「年が明ければ十七になります」

「へえ。さすがに漁師だけあつて、ここいらの坊とは違っていい身体してるよねえ」

赤い紅をたつぷり塗った唇から、舌なめずりする音が聞こえた気がして、一瞬背中が寒くなった。

「おい、ちよつと年増だけどいい女やな」

千太郎が耳打ちした。俺はまあ、と右の頬を僅かに歪めるのが精一杯だった。

だが女将は千太郎の言葉に充分満足したのか、「あんた達やから特別やで」と、持ち込んだ品に村長の希望よりも遥かに高い値を付けた。どうやら千太郎の事が気に入ったようだ。

その夜は女将の家に泊めて貰える事になった。気は進まなかつたが、望んだ金子に足りなければ、真冬の空の下で野宿をする羽目になつていたかも知れない。礼こそ言え、文句を言う筋合いはどこにもなかつた。俺たちは勧められるまま豪勢な飯をたらふく喰らい、しこたま酒を飲んだ。その間もずっと女将が傍にいたが、酔いが回るにつれ大して気にならなくなつていた。

気がついた時には、俺は一人座敷の座布団の上に寝転がっていた。どうやら酔いにまかせ、そのまま寝付いたらしい。部屋の中は真っ暗だったが、座敷の端には火鉢が置かれている。僅かな明かりを頼りに、千太郎の姿を探した。すると、奥の座敷から男女の息使いが漏れているのに気付いた。

まさか。襖の隙間からそつと覗くと、薄明かりの中、千太郎と女将が素っ裸で絡み合っているのが見えた。女将はこちら向きに千太郎の上に馬乗りになり、激しく腰を動かし、千太郎は寝転がったまま女将の両乳を揉みしだいている。

思わず唾を飲み込むと、女将が顔を上げた。しまった。

そう思った瞬間だった。女将は襖に向かい、狐のような細い目でもたもたと笑った。俺が覗いていることに気付き、更に腰を振った。喘ぎ声が一層高くなり、大きな乳が上下左右に揺れる。俺は慌てて襖から離れると、座布団で頭を隠した。

平吉の惨状に、女将は時折「まあ酷い、可哀想に」とわざとらしく身体をくねらせた。その動きは獲物を捕らえた大蛇の様であり、黄色の縞柄の着物は女郎蜘蛛を連想させる。襖の向こうの姿を思い出すと胃の腑の辺りがむかむかした。

「そやけどそんなにむごい状態なら、親御さんも平吉坊やのことは諦めた方がええやろうねえ。この町にも医者にはいるにはいるけど、とても手に負えないやろうし」

女将は溜息混じりに同情してみせたが、俺が話している間も、以前より遅しくなった千太郎の身体ばかり眺めていた。

「それに平吉は千太郎にはよくなついていたんで、葬式にはちゃんと出てやらなあかんと念を押されまして」

これは本当の事だった。平吉は元から人懐っこい子供だったし、弟を亡くしたせいもあるのか、千太郎も村の子供たちの面倒をよく見ていた。平吉のお母の留とめさんと俺のお母、そして千太郎のお母の

信さんもみな同じ古納村で育った馴染み同士で、村の中でも特別仲が良い。もとより、古納の人間の数などたかだか知れている。小さな村で好き好んで仲違いする者もそうはいなかった。

「そういう事情なら仕方ないけど残念やわあ。ねえ、千太さん？」  
拗ねたような女将の顔に、千太郎が慌てて両手を振った。

「女将さん、誤解せんとして下さい。何もなけりやあ俺たちだつて、町で一晩くらいゆっくりしたいのが本音なんですよ」

「分かつてるよ」女将は袂で口元を隠し、くくつ、と笑った。「あんたらがここに来る機会はまだ幾らでもあるだろうけど、平吉坊やの葬式は一度つきりだもんねえ」

女将の言い様に無性に苛立ったが、両の拳をぐつ、と握り、なんとか堪えた。

「そういう訳で、早うお暇せなあかんのです」

「そやけどな、魚の値ばかりが下がっている、という理由は聞かなあかんのとちやうか。俺たち漁師には死活問題なんやし。お前かてそう思うやろ？」

咄嗟にここに留まる理由を思いついたのか、と小さく舌打ちしたが、千太郎の言うことも正しい。

「ええと」咳払いをし、女将に向き直った。「もし良かったら、俺が古納に持って帰る品を用意する間に、女将さんから千太郎にその話をしてやって貰えませんかでしょうか。その方が手っ取り早いし、時間も無駄にならないで済みますし」

「ああ、それもそやねえ」女将はポン、と手を叩いた。

「そやや、それがええ」

千太郎も同じように手を叩き返す。目を見合わせ微笑む二人の顔に、思わず頬が引き攣りそうになった。

「で、俺はどないしたらええんや」

尋ねた千太郎に、腕組みをしながら答える。「そやな。八ツ時に例の大橋で落ち合おうか」

町に着いたのが四ツ半時だったので、あと一時以上ある筈だ。

「なんや、えらい忙しないな」

「せやから今その話をしてたんやろ。何を聞いたつたんや」

さすがに呆れた俺は、大仰に溜息を吐いてみせた。女将も声を上げて笑う。

「そうさして貰って構いませんかね、女将さん」

「そりやうちはええけど、あんたら昼餉ひるごも食べてへんのやろ。なんやったら汐さんも蒲焼でも食べてから商いに行ったらどないや」

俺は首を振った。

「折角ですけど、暑さにやられたみたいで蒲焼みたいに濃い味のもんはどうも……。途中でうどん屋かそば屋にでも寄りますんで、俺のことは気にせんといて下さい」

「そうかい。じゃあ仕方ないねえ」

仕方ない理由など何処にも無いだろう。俺がいなくなった後の二人を想像すると、ぜんざいが逆流しそうになる。それでも丁寧に礼の言葉を述べると、座敷を後にした。

「偉いご馳走になりました」

店先で客の相手をしていた番頭に声を掛けた。

「いいえ、とんでもありません」

番頭はほつとした様な笑みを見せると、客に「ちよつと待つておくんなはれ」と頭を軽く下げた。そして俺にそつと耳打ちをする。「女将さんの言い付け通り、前に来はった時と同じ相場で引き取らして貰いました。そやけどどうか、これは内密に頼みますわ。他の出入りのもんに申し訳が立ちませんから」

「解つてます。こちらこそ、助かりました」

金子の入った小袋を受け取ると、改めて店の品物を見渡した。確かに前に来た時よりも、売値が下がっている。

その理由もじき分かる。番頭に深々と頭を下げると、再び荷車を曳き出した。

まず道具屋に行き、大工道具を買い求めた。漁のために必要な物

は完璧に揃えなければならぬ。それから村の連中に頼まれていた釜や反物たんものといったものを、荷台に積んだ籠に次々に詰めていく。最後に結納の品を受け取ったが、まだ金子は十分に残っている。村の連中の喜ぶ品でも購おう。そう思い酒屋に寄った。

「あんちゃん、もしかして女主人のおる乾物屋の出入りなんか」

古納村から来たと言うと、酒屋の主人がそう訊ねた。

「そうやけど、それが何か？」

大きな甕に入った焼酎を荷車に括りつけた。荷車がぐつと重くなる。

「何かもへつたくれもあるかいな。あそこに入出入りするもんは、みな若うて筋肉隆々、色の浅黒い目鼻立ちのはつきりした男ばかりや。あんちゃんみたいに線が細つくくて歌舞伎若衆みたいなんは珍しい、と思つてな」

「そうなんですか」

主人は白髪交じりの顎髭を撫でながら、にやにやと笑った。どうやら女将の燕の一人だと思われたらしい。若衆のようだと言われている気はしないが、取り敢えず女将のお眼鏡には適わないと知つてほつとした。そして主人の言う「女将好みの男」が正しく千太郎の姿だと、思わず苦笑した。

「残念ながら、女将さんのお気に入りは俺やないんですよ」

「そうなんか。まあ、そうやろうな」

暫くの間、酒屋の軒先で主人と立ち話をした。どうやらあの女将の男好きは有名な話らしい。

それから、「若い娘に贈る簪を求めるのならあの店」、「土産の羊羹ならこの店」、「一町先の薬屋は値が高い上に混ぜ物が多い」などと、嗜好きらしくこちらが聞いてもいないことを次々と話した。黙つて頷く俺に気を良くしたのか、帰り際には上等な酒まで寄越してくれた。

鯉鈍屋の前まで来て腹具合を窺った。腹は減っているが相変わらず食欲はない。だが空腹のままでは帰り道が堪こたえる。稻荷飯だけを

求めると、千太郎と約束した大橋に向かった。



### 第三話

細い川が何筋も町を横切るように流れている。その中でも一番川幅が広く、町の出口に近い場所にある橋を「大橋」と呼んでいた。

雑草がぼうぼうと生い茂る河川敷に荷車を止めると、地べたに腰を下ろし、稲荷飯を頬張った。甘辛い出汁が口中に広がる。予想していたよりずっと美味だったのと、そよぐ風が心地良さのせいか、あつという間に平らげた。もうすぐ八ツ時の鐘が鳴る。草むらに寝そべり、大欠伸をかいた時だった。

傍らに石で出来た人形の様なもの落ちていたのに気付いた。何気なく手に取ってみると、それは古ぼけた地蔵だった。大きさは産まれたばかりの赤ん坊ほどで、何処かの悪童が河原に投げ捨てたのか、袈裟けさの部分にはあちこちに真新しい、欠けたような痕が残っている。

大きさからいっても子供の姿を模した地蔵なのだろう。広い額、垂れた細い目に小さな鼻。一昨日の夜の、平吉の様子を思い出した。千太郎の言う通り、既に息を引き取ったかもしれない。どうせ助からぬのなら、早く楽になった方が平吉も親兄弟も余程苦しまずに済むだろう。

地蔵を足元に転がし、目を閉じた。

おい、という声に目を覚ました。千太郎の背中越しの日はまだ高い。

「鐘が鳴ってからそんなに待たせてない筈やぞ」

ほんの僅かな間まどろんだらしい。

「ああ、悪い」身体を起こし、着物に付いた砂を払った。「それ…」

千太郎の手には先ほどの地蔵があった。

「これか。そこに落ちとったんや」

千太郎は足元を指差した。

「幾らボロでも、地蔵さんがこんなところに転がってんのは可哀想やろ。それにこの地蔵さん、どっか平吉に似てると思えへんか。峠の祠にでも入れてやったら、平吉も苦しまずに成仏するんちゃうかと思ってな」

「そうやな……お前がそう思っただら、そうしたりや」

千太郎の屈託のない笑顔。俺は欠伸を隠すふりをして両手で顔を覆った。指の間から見える地蔵の細い目が、心なしか釣り上がったように感じ、頭を振った。

「なんやかんやで、来る時より荷物が増えたみたいやな」

荷を確認しながら、千太郎は籠の隙間に地蔵を押し込んだ。

「ああ。番頭が……女将が弾んでくれたからな」

「それで、いくらか銭は残ったんか」

「ああ。結構残ってたから、村に土産の酒を買ったわ」

「やっぱりなあ」頭を？きながら、千太郎は溜息を吐いた。

「やっぱり、ってどういう意味やねん」

「ちよい、待ちや」袂の中に手を突っ込むと、「ほら」と鉄銭てっせんを数枚寄越した。

「おい、なんやこれ」

「なんや、って女将に貰った銭や。それがお前の取り分な」

「取り分、って俺は何もしてへんで」

「よう言うわ。俺と女将のこと分かって二人きりにしたんやろ。お陰でいい小遣い稼ぎさせてもろつたんや。遠慮なんかせんでええからな」

全く悪びれた様子も無くそう言つと、俺の指を掴み掌の銭を握らせた。

「それでおりんが喜ぶようなもん買ったり」

「おりん」俺は自分の拳を見つめた。「……知ってたんか」

「当たり前やろ。まあ、村の連中はまだ気付いてないみたいやけど、俺の目は誤魔化されへんで」

千太郎は得意げに鼻の穴を膨らませた。

「ほんまに、お前に隠し事は出来んな」

思わず苦笑した。おりんと俺の仲は、決して許されるものではない。だが秘密を守り抜くことの苦しさは、千太郎にだけは言おうか言うまいか悩んでいたところだった。

「だから、黙って受け取るとき」

俺は頷くと、小袋に銭を詰めた。

「ところで千太郎」

「なんや。心配せんでも言い触らしたりせえへんで」

拳で自分の胸を叩いた千太郎に、「そっちとちやう」と首を振った。

「肝心の、干魚の値が下がった理由は聞いたんか」

「あ」千太郎は口を開けたまま腕の動きを止めた。「そっいやそんなこと言うとつたよな」

「やっぱりな」大きな溜息がついて出た。

峠の祠に着いた頃には、既に陽が傾いていた。

鬱蒼と生い茂る木々に隠れるように建っている古い祠は、碌に手入れもする人間もないのか、苔まみれで、観音開きの戸の片方は腐って落ちている。

「全く、みんな冷たいよなあ」

祠の埃を息で払うと、千太郎は手拭いで丁寧に小さな地蔵を拭いた。俺も溜まった枯葉を草履の先で掃う。

「そやけどしょうがないんとちやうんか。なんせここには肝心の菩薩さんが居らんのやからな」

「まあなあ」

俺たちが峠越えをするようになってから、この祠に地蔵菩薩が鎮座していたことは一度も無い。

磨き終わった地蔵を祠の真ん中に据え、竹筒に注いだ酒を供えた。腰を下ろし手を合わせる。

「今夜から、お前がこの主さんや。だからどうか、平吉がこれ以上苦しmandすむように楽にしたってな」

手を合わせながら、ちらと千太郎の顔を見た。弟のことを思い出しているのだろうか、千太郎の瞳にはうつすらと涙が浮かんでいる。俺は心の中で、地藏を転がしたことを詫びた。

「何かこの地藏さん、魚みたいやな」

立ち上がった千太郎がふと呟いた。

「魚？」地藏を改めて眺めた。腕の部分は碎けており、袈裟には無数の疵がある。見ようによっては魚の鱗のように思えなくもない。

「平吉は魚に喰われた。平吉に似とる地藏さんは魚の格好をしとる。これもなんかの縁かもしれんな」

「考えすぎやろ」

俺は肩を竦めた。

「おい、汐。はよう起きんか」

お母が身体を揺さぶる。

「大変なんや。大変な事が起きたんや」

「もう、うるさいな。今日は漁を休んでもええよ、って言うたんはお母やろ」

古納に戻って来たのは明け六ツを過ぎてからだった。途中もたもたしていたせいで山の中で陽が暮れてしまい、山道で野宿せざるを得なかった。

「丸一日で町と村を往復して疲れてるんや。もう少し放っておいてや」

明り取りから洩れる日差しに目を細めると、もう一度枕に顔を突っ伏した。

だがお母も負けじと布団を引っ張る。

「そんなん解つとるわ。それでも大変なんや。ほれ、はよう起きや！」

大声で喚かれ、しぶしぶ身体を起こした。

「何やねん、いつたい」

「平吉がおかしいんや」

「平吉？ 今死んだんか。そんなん前から……」

「違うんや。生き返ったんや」

「生き返る？ 死んでないならまだ生きとる、の間違いやろ」

ぼんやりする頭を掻きながら、お母の顔を見た。口をパクパクさせ、明らかに動揺している。

「そつや、まだ生きとる。いや、そういうんやない。とにかくおかしいんだよ」

もう一つ要領を得ないお母の言葉に眉をしかめた。

「意味が分からんわ。もうちょっと解り易う言つてくれや」

「そつか」お母は大きく深呼吸をすると、今度はゆっくりとした口調になった。

「あのな。さつき私とお信ちゃんとで、お前たちが持つて帰った品を長の所おのに届けに行ったんや。その時長の家には誰がおつたと思う？ お留ちゃんと平吉や。お留ちゃんは涙ながらに長に頭を下げとるし、平吉はあんな大怪我を負ったとは思えないくらいピンシヤンして饅頭まで食べとったんやで。そんなん信じられるか？」

「嘘やろ」一気に目が覚めた。仮に平吉が命を繋ぐ事が出来たとしても、たった三日の内にあれだけの大怪我が治る筈はない。

「お母の見間違いやろ」

「私がお留ちゃんの顔を見間違う訳ないやろ。それに平吉も私とお信ちゃんに挨拶して来たんやから」

お母が言い終わらないうちに家を飛び出た。

浜に沿って同じような作りの家が五十軒ほど軒のきを連ねている。俺の家はその中でも船小屋に一番近い、端の方にあつた。そして一番丘側の奥まつた場所に、ひと際大きな茅葺の家がある。そこが網元でもある村長の家だ。

平吉のことはもう村中の噂になっていた。数十人の村人が集まり、村長の家までの狭い一本道を塞いでいる。村長の家の中の様子を窺

おうとしたが、人の壁がどうにも邪魔をする。爪先立ちで背を伸ばしてみようと、人混みの中に千太郎の姿がある事に気付いた。

「おい、千太郎！」声を上げ、人垣をかき分ける様にして千太郎に近寄った。

「何や、お前もお袋さんに起こされたくちか」

つんつるてんの着物から下帯を覗かせながら、にやりと笑った。

「ああ。それより、平吉の怪我が治ったっていうのは本当なんか」

「お袋はそう言ってたな。お前のところのお袋さんと一緒に平吉を見た、ってな」

そう言つて千太郎は自分の頭を叩いた。

「頭のさらしも無かつたらしいで」

俺は啞然とした。「そんなアホみたいな事があるんかいな」

「まあ、本人を見りゃわかるやろ」

突然、村長の家の方から歓声が上がった。人混みが自然に家に沿つて左右に分かれる。その中心を、平吉とお留さんが頭を下げながら歩いてきた。

「平吉や。ほんまに助かつたんか！」「海神様のご加護や！」

「ほんまに生き返つとる……」

俺たちはゴクリと喉を鳴らした。失くした片腕の袖はひらひらしているものの、足取りはしっかりしており、頭から額にかけての傷跡もすっかりと塞がっていた。

「あ、千太郎さんに汐さん」

お留さんが俺たちに声を掛けると、平吉が千太郎に駆け寄つてきた。

「千太兄ちゃん。おいら、怪我が治ったんやで。ほら凄いやろ」

腕を伸ばした平吉を千太郎が抱きあげる。間近で見ると、それはまさに奇跡としか言いようのない回復ぶりだった。村人たちが二人の周りに集まる。

「ほんまやな。俺でももう助からんと思つてたくらいやったのに」

「そうらしいなあ。おっかさんも兄ちゃんたちもそない言うつた

わ。でもおいらは全然覚えてないねん」

「その方が痛みを感じんで済んだんやから良かったやないか」

「そつや。まだ子供の平吉が、腕を失くす以上の苦しみを味わう必要はない」

傍らの男の言葉に周りの人間も頷く。

「でも」千太郎の胸に顔を埋め小さな声で言った。「もう兄ちゃんらみたいには乗られへん」

「そんな気にせんでええ。片つぼの腕がなくても、古納には幾らでも仕事はある。平吉は塩作りの名人になったらええんや。そやる？」

千太郎は平吉の頭を撫でながら微笑んだ。その表情は昨日の昼間、乾物屋の女将に見せた笑顔とは全く違うものだ。時々千太郎のことが良く解らなくなるのは、こういうところだった。

「うん、そやな。きつと魚の神様がおいらに味方してくれたんやな」

「魚の神様？」

「もう、この子ったら起き上がってからその話ばかりするんのですわ」

お留さんは困惑したように首を傾げた。

「意識を失っている間、不思議な夢を見たそうなんです。なんでも頭は人間、胴体は魚の形をした生き物に、すんでのところで助けられたとか何とか言うて」

「へえ。まるであの地蔵さんみたいやな」

「地蔵？」「何の話や」「お前ら何か知つとるんか」

村人たちが一斉に声を上げる。俺は千太郎に代わって町で拾った地蔵の話をした。

「汐の話がほんまの事やったら、古納のもんはみんなその小さい地蔵さんに礼を言いに行かなあかん」

いつの間にか、村長が側にいた。小柄な老人の背筋は真直ぐ伸びており、陽に焼けた肌と白髪交じりの総髪にはまだ艶が残っている。「あつ、村長。えらいすんません」

千太郎は慌てて平吉を下ろすと、ぺこりと頭を下げた。俺たちもそれに倣う。

「そんなに畏まらなくてもええ。それより、その話をもっと詳しく聞かせてくれんか」

俺たちは目を合わせた。

「詳しくと言ったって、今話したことが全部なんです」

「という事は、打ち捨てられた地蔵を拾い、古い祠に入れてやっただけで、その地蔵はお前たちの頼みを叶えてくれたことになるんな」

「まあ、そういうことになります」

平吉が早く死んで楽になるように祈ったとは流石に言えない。

村長を腕を組んで暫く考え込むと、「よし」と手を叩き、村人たちに向かつて言った。

「手の空いている者の中で、大工仕事の得意な者はすぐに出かける支度をするように」

村人たちも村長の言葉の意味を理解すると、各々大工道具や木材を取りに向かった。

「お供えもんも用意せなあかな」

「そらもつ」お留さんは興奮した様子で何度も頷いた。「この子を助けてくれたお地蔵さんの為やったら、なんでもさせて貰いますんで」

「うん。幸い、この二人がええ買い物をしてくれとるんでな。功德くどくの高い地蔵さんの為やったら、村からも出来るだけのもんをさして貰うからな」

信心深い村長は、慈悲に満ちた目で平吉の姿を眺めた。



## 第四話

翌日はこの時期にしては珍しく波が高かった。風が強く、沖には灰色の雲が垂れこめている。

ひっきりなしに村の者が地蔵の話を聞きに来るのにうんざりした俺たちは、船小屋の裏に向かい合って座り、破れた網の修理をしていた。

「すっかり村のもんはあの地蔵のお陰やと思ひ込んでるみたいやな」  
「そのおかげでええ酒が飲めたやないか」

千太郎はいつものようににやりと笑った。吐く息にまだ酒の匂いが残っている。

昨夜は村人総出で村の端にあるお堂に集まり、平吉の回復を祝った。俺たちは靈験あらたかな地蔵を発見したということで、平吉と同じように上座に座らされ、白い米の飯と上等な酒を振舞って貰った。

「みなが信心深いのはええことやないか。実際平吉が楽になったことには間違いないやし」

「まさかお前」訝りながら千太郎の顔を覗き込んだ。「お前も神通力とやらを信じてるんか」

「そんなわけあるかいな」

千太郎は片手を振りながら苦笑した。「俺が地蔵さんや神さんに手を合わせるの、ただの験担ぎで、まじないみたいなもんや。ほんまに神仏に人の生き死にをどうにかする力があると思ってるわけやない。そやから汐が神仏なんておるわけない、って言うても罰当りやと思つたことはないで」

俺はそうか、と息をついた。

もとより信仰心の薄い俺と違って、千太郎は子供の頃から村の道祖神や、道端の地蔵にも手を合わせている。兄貴が鯨取りに行った時も、弟が病に伏せつた時も、朝晩欠かさず神仏に兄弟の無事を祈

っていた。だが神仏が千太郎の祈りを聞きいれる事はなかった。

それでももし村長の言う通り、あの地蔵に人知を超えた力があるのなら、地べたに転がしたことを一万遍だつて謝つてもいい。

「ただな、やつぱり平吉の治り様は尋常やないと思う。前の晩まで頭の血は止まらんかつたらしいし、千切れた部分は膿んで腐りかけとつたんや。それがああも綺麗に治るもんやろつかと考えると、長やないけど神通力とでも言わな説明がつかん、そう思つとるんや」

返事に詰まつた時だつた。背後から「兄ちゃん」と呼ぶ子供の声が聞こえた。

「やつぱりここやつたんか」

振り返ると、平吉が立っていた。話を聞かれたのではないかと一瞬どきりとしたが、平吉はいつもの愛嬌のある笑顔を浮かべている。「なあ、邪魔はせえへんから、ここにおつてもええやろ。家におつても何もすることないし、暇でしゃあないねん」

「別に構わんけど、お留……母ちゃんは心配するんやないか？」

「大丈夫。雨が降る前に家に戻る、つて言つた」

平吉は千太郎の横に腰を下ろすと、作業を黙つて眺めた。俺たちも黙々と網針を動かし続ける。

「汐兄ちゃんは手先が器用なんやな」

暫くすると平吉が感心したように声を上げた。「千太郎ちゃんの繕つた縫い目はバラバラやのに、汐兄ちゃんの目はきっちり揃つとる」

「バラバラ、つてなんやねん」

既に作業に飽きていた千太郎は大きな溜息をつくつと、網針を放り投げた。

「千太郎はこういう細かい作業より、一本釣りの方が得意なんや。

なあ、千太郎？」

含みを持たせてそう言つと千太郎もふふん、と笑つ。「ああ、それもとびきりの獲物をな」

「そうなんや。やつぱり千太郎ちゃんは凄いんやなあ」

平吉は無邪気に片手で膝を叩いた。

「いいや。平吉の方が何倍も凄い」

本心だった。十一の子供が腕を失くしてもこうして明るく振舞う様には、心底頭が下がる思いだ。

千太郎も同じ気持なのだろう、何度もうん、うん、と頷いた。

「いややなあ、もう」平吉は照れたように頬を掻いた。

「じきに降るな」

空を見上げて呟いた。このところの暑さが嘘のように、時折湿気混じりの冷えた風が吹き抜ける。「怪我に湿気はよくないやろ。痛みはないんか？」

「嫌やなあ、汐兄ちゃん。雨が降る前に肘や腰が痛くなるんは年寄りだけやで」

平吉はカラカラと笑った。

「そやけど、全然痛んだり気分が悪くなったりはせえへんのか？」

「ちよつとも。なんせおいらには魚の神様がついとるからね」

俺たちの間に僅かな緊張が走る。千太郎は咳払いをすると平吉の肩を抱いた。

「なあ、平吉。魚の神様っていうのは、夢に出てきた神仏なんやろ」

「夢やない。ほんまにおるんや」

平吉は鼻を翳った。「兄ちゃんらも、どうせ信じてくれへんやろうけど」

「そういう意味やない。海には海の、山には山の神様がいてるんや。魚の神様がおつても不思議とちゃうけど、元が魚やったら海の中でしか平吉を守ってくれへんのとちゃうかな、思っただけや」

慌ててそう言った千太郎に俺も頷く。

「違う。魚の神様は陸おかに住んでるんや。でもお地蔵さんとは似ても似つけへん。魚の神様はどんな神仏の話にも出て来んような、不思議な格好をしてるんやで」

意外な言葉に、俺たちは首を捻った。「どういう事や。魚の神様って言う位やから、海の中の生き物なんやろ？」

すると平吉は小鼻を膨らませながらへへん、と笑った。「おいらの神様は、魚の格好をした綺麗な女の人やねん」

「なんやと？」千太郎は平吉に噛み付く勢いで顔を近付けた。「まさか魚に女の乳が生えとる、言うんか。それとも鰓えらで息する女がおる、つちゆうことか」

「アホか、お前は。そんなん神どころかただの化けもんやないか」呆れた俺は網針を千太郎に向かって放り投げた。千太郎が俺を睨みつける。

「何言うとんねん。女の乳をくつつけた魚を捕まえてみい、見世物小屋にええ値段で売れるやろうが。いや、売らんでもええ。ここらに括くり付けとつたら余所のもんがこぞつて見に来るやないか」

「身体中に魚の鱗をつけるのが趣味の、頭のおかしな女やつたらどないすんねん。それかただの野太い片足の女か、どつちかや」

つむじの辺りで指先をくるくる動かして見せた。そして互いに目配せする。

「どつちにしても、ただの夢の話や」

「そつちやな」

千太郎と二人で苦笑いをする、平吉が大きな笑い声を上げた。

「兄ちゃんらはほんまに面白いなあ。……神さんには内緒やつて約束したけど、兄ちゃんらには特別にほんまのこと話したるわ」

俺たちは再び目を合わせた。

七ツ時には俄に空が暗くなり、激しい雷鳴が響き渡った。滝のような雨が屋根を打つ。

舟は全て岸に繋がれ、軒先にも浜にも人の姿はない。俺は掌に納まる小袋を握りしめると、傘も差さずある場所に向かった。

集落を出て、生い茂る木々に挟まれた一本道を進む。全身ずぶ濡れになり、泥水の溜まる轍わだちに時折足を取られそうになるが構わず走り続ける。

半里はんりも過ぎたところで小さな芋畑が現れた。蔓の伸びた畑の奥に

ぼつんと建つ、一軒の古い土蔵。細い畦道を慎重に進みながら、辺りに人気のないことを何度も確認する。

俺はふう、と息を整えると土蔵の扉を叩いた。

「おりん。俺や」

すぐに返事が聞こえた。蝶番の錆びた音とともにおりんが顔を覗かせる。「汐さん……。来てくれたんやね」

「当り前やないか」

直ぐ様おりんを抱き寄せ、唇を吸った。おりんが甘い息を漏らす。待たしてもうたな。すまん

「そんなん気にせんといて。ほら、濡れ鼠やないの。早く入って」

「ああ」おりんの身体を抱きながら土蔵の中に入った。

三和土で下駄と濡れた着物を脱ぎ、渡されたさらしで身体を拭いた。

薄暗い土蔵の中は、十分に人が生活出来るように作り替えられている。厨には井戸もかまども設えられ、板間の奥には座敷もある。

囲炉裏には火が入れられていた。身体が冷え切っていた俺は早速火にあたる。おりんは濡れた着物を竹の棒に差すと、囲炉裏に翳し、鉄瓶の中の白湯を湯呑に注いだ。そして黙って俺の肩に頭を寄せる。こうしておりんの髪の毛の香りを嗅ぐのは一月振りだった。

「これ、土産や」

小袋の中の品をおりんに手渡した。二本の指先ほどの大きさしかない漆塗の箱。

おりんは小箱を開けると目を大きく見開いた。

「紅やないの。ええの、こんな珍しい物。それにこういう物って高いんやろ？」

恐縮したようによりんは俺を見上げた。

「ああ。お前の為に……千太郎が買ってくれたんや」

「千太さん？」おりんはうろたえた。「どういう事なん。うちのことは、村の人らに知られたらあかんのとちゃうの？」

俺は首を振った。「あいつは信用出来る」

「でも……」白い肌が更に青白くなる。「他の人や村長にこんなことが知れたら、うちはここにおられへんなる、って言うたんは汐さんやない」

「大丈夫や」俺は断言した。「千太郎のことは心配せんでええ」

町を一通り見回してみても、おりんが喜びそうな気の利いた品が思い付かず悩んでいると、千太郎から「紅なんてどうや。年頃の女やったらだれでも嬉しがるで」と言ってきた。

素直に化粧屋に寄り、小箱の紅を買った。帰りの道すがら、俺たちはおりんのことを話した。

千太郎はおりんと理無わじない仲になった当初から気付いていたらしい。俺が子供の頃からおりんに惚れていたことも知っていた。

「ちよつとつけてみいや」

戸惑いながらもおりんは指先で紅をひいた。「どうやろうか」

振り向いたおりんの頬には赤みが差し、ふっくらとした唇には曼殊沙華のような紅が映えるている。

目を細め、おりんの顔をしみじみと眺めた。「綺麗や。菩薩様よ、何倍も何倍も綺麗や」

綸子りんすの織物のように、光沢のある滑らかな餡色の長い髪。ビードロのように輝く薄鼠うすねずの大きな瞳。抜けるような白い肌、そして彫の深い、美しい顔立ち。

おりんが古納に現れた時のことを鮮明に覚えている。あれはまだ俺が七つになつたばかりの春先の事だった。

浜にぼろぼろの小船が流れついた。船には一人の女の子が乗っており、見つけた村の漁師がすぐに村長の元に連れて行った。年の頃は五つか六つ、といったところで、長く漂流したのか、脱水が酷く息も絶え絶えだった。

それだけなら特に珍しいことではなかった。喰い詰めた親が我が子を海に捨てる事などままある。運良く生き残つた子供が、子のいない年老いた夫婦や、働き手を求める家の者のもとで育てられることもあった。

しかし村人の多くが、この哀れな子供を村に迎え入れるのを嫌がった。

おりんはこの国の者ではない。外つ国とくにから来た人間だ。それが村人の不安を招いた。

この頃、古納村は深刻な不漁続きで、まともな飯も食えない状況が何カ月も続いてきた。それを突然現れた異国の少女が招いた災いだと言い張った者がいたのだ。それが如何に馬鹿げた話かと解つていても、誰しも自らの不幸は得体の知れないもののせいにした方が楽だったのだろう。少女はたちまち悪意に晒された。

だが村長はその子供を見捨てる事はしなかった。みなの前で、この異国からやって来た少女も、古納の者も、同じ赤い血が流れる人間だと言いつつ。村に村長に逆らひだて出来る者は誰一人いない。しぶしぶながらも、村人はこの少女を受け入れる事にした。

少女はおりん、と名付けられ、村長の家で育てられることになった。初めのうちはその存在を疎う者も多くいたが、やがて誰も何も言わなくなった。おりんが現われて間もなく不漁が収まり、二年も経った頃から古納の塩は名産品として高値で売れるようになった。

村人の中には、おりんを古納の守り神として崇める者も出だした。同時に、死人が出る度におりんが名ざしで災いをもたらしたと騒ぐ者もいた。それでも月日が流れるうち、おりんは村に馴染み、俺たちと同じ村の子供として生活するようになった。

おりんは年を重ねるごとに美しく成長していった。色気づきだし子供から、それこそ孫までいる男まで、おりんの美貌と子供らしからぬしなやかな身体つきに色目を持つようになっていた。

噂は噂を呼び、余所の村からも、夜這よだを仕掛ける者が続出した。だが異国の人間であるおりんを簡単に嫁に出す訳にはいかない。かといって何時までも村長が庇護し続けられるわけでもない。

おりんの扱いに困った村長は、おりんが一四、五になった二年前の秋、この土蔵に連れて来た。この場所が選ばれたのは、村の奥まったところであり、他の村の者が簡単には出入りできないこと、そ

してここに通じる道は一本しかなく、良からぬことを考える輩から  
護り易いためだろう。

初めの年は、必ず村の女がおりんとおりんの元を訪れる人間を見  
張っていたようだが、今ではそうだったことはない。以前、おりん  
に夜這を掛けようとした男が捕まり、村人の前でこつ酷い目に遭わ  
されてから、わざわざおりんの元に通う男どももいなくなった。こ  
のところ、仲間内でもおりんの名が出てくることはまれだ。

一方では守り神、もう一方では災いをもたらす異人として、土蔵  
に閉じ込められ、今ではその存在も忘れられつつある。村長の妹が  
数日に一度食料を運んでくる以外、おりんは誰と話すことも無く、  
孤独な生活を送ることを余儀なくされていた。



## 第五話

「長いこと待たせてもつたな。寂しいなかったか」

うなじを抱き寄せ、おりんの胸元に手を差し入れる。指先から柔らかくしっとりした感触が伝わってくる。俺の肩に顔を寄せると、おりんは呟くように言った。

「ううん。汐さんは約束を破ったりせえへんの知ってるから」

着物が布団の上に落ち、滑らかな肌が露わになる。体を横たえ、乳房に顔を埋めると、おりんに初めて触れた頃を思い出した。

まだ村長に引き取られたばかりの頃のおりんは、まともに言葉も話せなかった。いや、その言い方は正確ではない。俺たちと同じ言葉を話せなかった、というだけだ。だが子供同士が遊ぶのに、言葉など大して重要ではない。男も女も関係なく、年頃の近い子供たちが集まると、竹馬や独楽、海に潜っては拾った貝の数を競った。時には余所の村に柿やみかんを盗みに行つて、大人たちに大目玉を食らつたこともある。

当時はおりんと一緒に遊ぶ事を露骨に嫌がる大人もいたが、季節が一つ、二つと巡る度にそんな事を口に出す者も減つて行つた。おりんも言葉を覚えていき、次の春には村の子供たちとともに、村長のもとで読み書きを習つようになった。

村長が村人から尊敬を受けているのは、網元だからという理由だけではない。他の村の者たちとは違い、古納に住む人間の殆どは読み書きに不自由せず、算盤もはじける。それが当たり前だと思つていたが、寒村の者はそうはいかないらしい。

元は豪商の生まれの村長は、子供の頃から町の寺子屋に通い、高い教養を身につけていた。やがて古納に移り住んだ村長は、村人が豊かに生活するためには学問が不可欠と考え、村の子供に無償で学問を教えていた。お父もお母もそうであったように、俺や千太郎も

七つの頃から字を教わった。

古納の者が行商に行っても泣きを見ることなく、店主たちと対等に交渉できるのは、正に村長のお陰だった。

手習いを始めて数年も経つと、物語から歴史書まで、幅広い本を読めるようになっていた。既に漁師として船に乗り、陽が明ける前から仕事をして陸に戻る時刻にはくたくたになる日々が続いていたが、それでも合間を見つけては、村長の元へ足を運び、本を手にした。

古納と周りの村や町しか知らない。漁をする以外の仕事を知らない。古納が古納になる前の時代を知らない。だが、本の中には考えられないような仕事を生業とする者や、戦いに明け暮れた戦国時代の武将、恋の歌ばかり綴る平安貴族など、俺の知らない人間たちの生活がある。俺は夢中になって本を読み漁っていた。

ある日、いつものように離れの縁側に寝そべり、本を読んでいると、頭上で声が聞こえた。

「噂通り、熱心なんやね」

おりんが茶盆を手に立っていた。慌てて身体を起こす。

「そのままであえよ」

小さく微笑み、俺の横に腰を下ろす。茶と団子の乗った皿を傍らに置くと、手の中の本を覗き込んだ。「難しい字ばかりや。うちは読まれへん。さすが長が汐さんのことを村一番の勤勉家、って褒めるだけのことあるわ」

そう言っただけで感心したように首を振った。

「長は何でも大袈裟過ぎるんや」

照れ隠しに、勢いよく団子を口に押し込む。「それより、おりんも裁縫はちよつとは上手くなったんか」

「うん。もう浴衣も仕立てられるようになったんよ」

得意げに鼻を鳴らした。そして思い出したように頬を赤く染める。

「前とはちやうんやから」

「そら大したもんや」茶を啜りながら笑った。

おりんは村長の孫の嫁に裁縫を教わっている。一年ほど前、釘で引っかけた着物を繕って貰ったこともあったが、お世辞にも腕が良いとは言えなかった。だが何故か、不器用な掛接ぎの跡を見る度、何となく嬉しいような、くすぐつたいような気分になった。

俺たちは地べたに向かつて足をぶらぶらさせた。ひざ丈の着物の裾から、おりんの白い脚がすらりと伸びて、俺は思わず目を逸らした。

「ええ風や」じきに夕暮を迎える庭には、浜万年青はまおせきが白い花を揺らしている。「こうやって話すも久しぶりやな」

「ほんまに」おりんも頷く。「みんな元気なん？ 前に千太さんの弟が亡くなりはった、って聞いたんやけど」

「ああ。あんときはさすがに千太郎もかなり落ち込んでたけど、最近はよう笑うようになったな」

「良かった」おりんは心底安心したように息を吐いた。

今ではみな年頃になり、家業の手伝いをするようになってからは何かと集まって遊ぶこともなくなった。だが幼い頃から身体の大きかった千太郎は、常に悪戯いたづらごとの首謀者でもあり、年下の子供たちにとっては兄貴分でもあった。そして余所者がおりんのことを好奇の目で見ないよう、常に守ってやっていた。

おりんは千太郎のことを慕っている。千太郎だって憎からず思っている筈だ。もし、おりんが村の者の嫁になるのなら、きっとその相手は千太郎だろう。この頃は本気でそう考えていた。

「千太郎はいい奴やで。弱いもんいじめは絶対にせえへんし、こそこそ人の陰口を言うたりもせえへん。腕つぶしも強いし、釣りも上手い。口は悪いけど頭は悪くない。……ほんまにええ奴や」

何となく、そんな言葉がついて出た。今にして思えば、自分自身にそう言い聞かせ、諦めをつけようと思っていたのかもしれない。

「ああいう亭主を持ったら、おりんも幸せなんとちゃうか」

おりんは急に黙りこんだ。そして薄鼠の瞳を暫く彷徨わせると、重い口調で言った。

「うちは誰のお嫁さんにもならねへん。千太さんとも、他の人とも、それこそ汐さんとも」

えっ、と思わずおりんの顔を覗き込んだ。

「うちはこの国の生まれやないから、嫁に行くのも、子供を持つんも、許されへんのやって。一生、こつやって家の中で暮らなあかん。長もおばもそう言うてはる」

そう言ったおりんの横顔は、自嘲するかのように僅かに歪んでいた。

「そうなんか……」

何と答えていいか分からなかった。ただ、おりんが他の男の家に嫁に行くことも、子を産むこともないと知って、妙に安堵したのは間違いない。それに一生籠の中の鳥と言われたおりんの心情を量れるほど大人でもなかった。

「それでもおりんが嫁ぎたいと思うような男は、古納にはおらんのか」

「嫁ぎたい？」

一瞬、しまったとは思ったが、言ってしまったものは仕方ない。

「その、ええなあ、と感じる男はおらんのかな、と思つて。おらんのならずつと一人もんでもええやろうけど、好いた男があるんやとしたら、寂しい感じるんといちゃうかな、と思つたんや」

「そらうちやつて」

おりんが言いかけた時、背後の障子が派手な音を立てて開いた。

腹の突き出た男が腰に手を当て、脂ぎつた顔で俺たちを見下ろす。

「りん。いつまで油売ってるんや。晩餉の支度はせんでええのか」

「すみません、若さん」おりんは慌てて立ち上がると、裾を直し頭を下げた。

この阿呆が来とつたんか。豚蛙め。心の中で悪態を吐いた。

若さん、と呼ばれたのは、村長の又甥に当たる香具師<sup>やし</sup>家業の男だった。三十路近いのに未だに嫁も娶らず、博打を打つては女を買い漁る、という具合で、村長の親類とは思えないような人間だ。普段

は町に住んでいるが、何か揉め事を起こす度に古納に逃げ込んで来る。粗暴な割に気が小さく、村にとっては厄介者ではあったが、村長の縁戚ということもあり無下にも出来ずにいた。

「すぐに手伝いますんで。失礼します」

そそくさとおりんは母屋に戻って行った。俺もゆっくり立ち上がると、本を借りた礼を言い、草履に足をかけた。

「おい、お前。弥助の家の、汐とかいう奴やったな」

若さん 鍊二は傲慢な口調で俺を睨みつけた。

「確かに弥助は俺の父親ですけど、それが何か？」

「あまり気安う、りに色目使うんやないど」

「色目？ 何の事ですか」

「しらばっくれるんやないで。まだ下の毛も生えてへんようなガキのくせに。あれはじきに俺のものになるんや。長のお気に入りやからいつて調子に乗つとつたら、承知せえへんど」

鷲鼻を膨らませ鍊二は凄んで見せたが、所詮小男の言う事と聞き流す。

「意味がよう分かりません」

それだけ言つて踵を返した。

月日は流れ、俺は十六になった。

十五も過ぎれば一端の男と扱われるようになる。病がちなお父の代わりに、船頭も務めるようになっていた。

その日も早朝から仲間たちと船を出し、仕掛けを終えて陸に戻った時だった。

「なんや最近、辛気臭い顔しとんなあ」

焚き火にあたりながら千太郎が言った。浜には冷たい風が吹抜けている。

「そうか？ いつもと変わらんけど」

お母が届けてくれた握り飯を頬張り、竹に差した小魚を火で炙った。油が垂れると同時に、香ばしい匂いが辺りに広がる。

「さてはお美代のことを気にしてるんやろ」

庄三が俺の背中を叩いた。「お美代は昔から汐に惚れとつたみたいやもんなあ」

「別にそんなんとちゃうわ」俺は肩を竦めた。

年の暮れに、隣村のお美代との縁談が持ち上がった。縁談と言っても、仲人を立てた正式な形ではなく、相手方の親がうちの親にそれとなく聞いただけのものだ。お美代とはそれ程親しい間柄ではないが、子供のころから村に野菜を届けに来ていたので、それなりに面識はある。器量はそこそこだが愛嬌のある娘で、以前から俺のことを憎からず思っていることは感じていたが、丁重に断った。向この父親も娘の婿には同じ村の男を、と考えていたらしく、この話はあるさり立消えた。ただ人づてに、お美代が塞ぎ込んでいるとは聞いていた。

「筆下ろしもまだ済んどらんのに、いきなり娶れ、って言われてもそら考えるわな」

既に名うての遊び人を自負する千太郎は、俺の手の小魚を奪うと大きな口で齧りついた。「大体、汐は真面目すぎるんや。俺や庄三を見習え」

「お前らと一緒にすんなや」

俺は溜息を吐くと、竹串に桶の中の魚をもう一つ突き刺した。

「おい、汐。俺と千太郎と一緒にせんといてくれや。俺は千太郎みたいに節操のない男やないで」

そういう庄三も、余所の村の後家さんと懇ろになっっていることを、何かと自慢している。

俺も他の男たち同様、女の身体に興味はあった。初めて千太郎に女との目合の話聞いた時には、興奮を覚え、素直に羨ましいとも思った。

既にこの頃、おりんは土蔵に軟禁され、話をすることも、顔を見ることがさえも叶わなかった。いつその他の女と寝てしまえば割り切れるのだからか。そう考え、後腐れのない女を宛がって貰ったことも

ある。だがその場に及んでおりんの顔がちらつき、どうしてもその気になれなかった。千太郎や庄三には「へたれやのう」と笑われるが、以来女と二人きりになったことも、廓に出向かったこともない。「おい、村一番のへたれの女好きが来たで」

庄三が指差した先には、香具師の手下と思しき二人の若い男を従えた鍊二がいた。鍊二は煙管を銜え、大柄の着物の上に、袖のない麻袋のような外套を羽織っている。遠目にも、額に傷を作っているのが分かった。

「また性懲りもなく町でなんかやらかしたんやる。ほんま、しょうもないやつちゃ」

千太郎が鼻で笑った。

「あんなんが親戚やいっんやから、長も苦労するわな」

「そやけど奴が長の又甥なんは変わらんからな」

頷き合う俺たちに気付いたのか、鍊二たちはゆっくりこちらに歩み寄って来た。俺たちは視線を素早く交わす。

「よう、坊主ら。ちよつと見ん間に図体ばかり大きくなったんちやうか」

相変わらず横柄な態度だが、その頬は前よりやつれている。出張った腹も幾らか瘦せたようだ。側に立つ男たちも何処か怯えたような、緊張した面持ちで辺りを窺っていた。

「お陰さんで漁は順調やし、長にはよう面倒見て貰ってますから」  
庄三は立ち上がると、嫌みのない程度に微笑んで頭を下げた。俺もそれに倣う。鍊二も満足そうに軽く頷いた。だが千太郎は丸太に座ったまま、鍊二の顔を見ようともしなかった。

「お前は千太郎か。網元に向かつてええ態度やな」

「網元？ 古納の網元は村長とその息子はん、それと長の弟はんだけやと聞いているんやけど」

「その弟の孫が俺やないか。古納の人間のくせに、そんなことも知らんのか」

「知らん。もしそうやとしても、真の孫はあんたみたいにがさつで

品のない人間やないと思うわ」

「よう言つたな、お前」

鍊二が頬を引き攣らせる。しかし千太郎は相変わらず小馬鹿にしたような顔を崩さなかった。

古納の人間は大概鍊二のことを嫌っているが、千太郎は特別鍊二を嫌っていた。嫌っている、というより蛆虫を見るかのように嫌悪し、見下していた。それでも今のようにあからさまに突つかかるのは初めて見る。

「お、おい、千太郎。幾らなんでも……」

庄三は焦った様に千太郎の肩を叩いた。

「もうええ」鍊二は吐き捨てるように言った。「そうやって突つ張つてられるのは今のうちや。すぐに吠え面かかしたるからな」

「かかされる面なんて持ち合わせてへんけどな」

「ふん。女のことになつたら分らんやろ」

「女？」千太郎は初めて顔を上げた。「どういう意味やねん」

「こんな田舎でもええ女はおらんことはないからな」

そう言つて背中を向けた鍊二たちの姿に、俺は胸がざわつく様な、嫌な予感がした。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7199w/>

---

嗤う人魚

2011年11月10日03時21分発行